

英語を母語とする日本語学習者を対象とした
日英語ナラティブの比較
—トピック名詞句に着目して—

鈴木 一徳

A Comparative Study of Narratives in Japanese and
English by English-Speaking Learners of Japanese:

Focusing on Topic Noun Phrases

Kazunori Suzuki

This study investigates English-speaking learners' oral narratives in Japanese and English in order to clarify their narrative abilities. Six English-speaking learners of Japanese participated in the experiment. The participants were college students in the U.S. In the experiment, they were asked to tell a story in Japanese and English, based on a picture-book, *Frog, where are you?* (Mayer, 1969). Their speech data were transcribed and analyzed in terms of how topics were introduced and maintained with regard to “discourse markedness” proposed by Chaudron & Parker (1990). Results show that learners of Japanese had difficulty distinguishing particles *wa* and *ga* in the known context.

* 本論文は、2015年10月16日（金）にVassar College（New York, USA）にて開催された、The New York Conference on Asian Studies 2015（NYCAS2015）での口頭発表（タイトル “Topic Management in Oral Narratives in Japanese and English by English-Speaking Learners of Japanese”）の内容をもとに、加筆・修正を施したものである。

1. はじめに

本研究では、英語を母語とする日本語学習者を対象に、第二言語 [second language : 以下、L 2] である日本語、および母語 [first language : 以下、L 1] である英語のナラティブ (narrative) の比較を通して、類似点や相違点を明らかにすることを目的とする。

Chaudron & Parker (1990) を参考に、鈴木・浅野・平川 (2014) では日本語母語話者を対象にした日本語のナラティブでのトピック名詞句の導入・維持を調査した。また、鈴木・浅野・平川 (2015 a) では、日本に在住する外国籍 (中国・フィリピン) の中学生を対象にした日本語のナラティブでのトピック名詞句の導入・維持を調査した。本研究では、田浦 (2014) が述べているように、二言語使用者 (バイリンガル話者) の両言語のナラティブを分析することで新たな知見が得られる可能性があるという示唆から、同一の調査参加者を対象に、日英両言語でのナラティブの比較を行う。

本論文の構成は、以下の通りである。まず第2節で先行研究の概観を行い、第3節では、本研究の研究課題、調査協力者及び研究方法を述べる。第4節では、ナラティブにおけるトピック名詞句の導入・維持について、2種類の調査の結果を提示し、考察を行う。そして、第5節では、本研究のまとめ及び今後の課題を述べる。

2. 先行研究

ナラティブ研究では、文字の無い絵本 *Frog, where are you?* (Mayer, 1969) [以下、Frog story] を用いたものが多く存在する。研究方法は、Frog storyを調査参加者に見せ、物語の内容を語ってもらい、それを録音し、文字起こしを行って、研究材料としたものである。Frog storyは、各ページ、または見開き2ページに1つの場面が描かれ、合計24の場面

で構成されている。登場する人物（または動物）は、主人公の男の子、その男の子が飼っている犬、男の子が飼っているカエル、蜂、プレリーリードッグ、フクロウ、ヘラジカ、カエルの家族である。物語の内容は、男の子と犬が寝ている間に飼っていたカエルが逃げ出し、犬と一緒にカエルを探しに行く、というものである。その冒険の中で、いろいろな動物と出会ったり、いろいろな困難に出くわしたりするが、最終的にはカエルの家族と出会い、男の子はカエル1匹を連れて帰る、というものである。

以下で、トピック名詞句の導入・維持に関する先行研究として、Chaudron & Parker (1990) (2.1節)、鈴木・浅野・平川 (2014) (2.2節)、鈴木・浅野・平川 (2015a) (2.3節) を概観する¹。

2.1. Chaudron & Parker (1990)

Chaudron & Parker (1990) は、談話的有標性 (discourse markedness) と構造的有標性 (structural markedness) という2種類の有標性 (markedness) の観点から、日本語を母語とする大学生を対象に、英語の談話におけるトピック名詞句の第二言語習得研究を行った²。Chaudron & Parker (1990) は、3種類の談話文脈 (新規のトピックの導入、既知のトピックの (再) 導入、継続的なトピックへの言及) を仮定した上で、「談話的有標性」を定義した。談話中で新規に登場する人物や物などをトピックとして導入する場合は、新情報の提示になるため、

1 Frog storyを用いたナラティブにおけるトピックの導入・維持に関しては、鈴木・浅野・平川 (2014, 2015a) の他にも、日英語バイリンガル児童を対象としたKajiwara & Minami (2008) や、英語または韓国語を母語とする日本語学習者を対象にしたNakahama (2009) などがある。

2 本研究では、学習者のナラティブから複雑な形をした名詞句 (例えば、形容詞や連体修飾を伴った名詞句) がほとんど観察されなかったことから、トピック名詞句の構造的有標性は扱わずに、談話的有標性の観点でのトピック名詞句の具現化に関する分析を主に扱うこととする。

談話的有標性の観点からは最も有標である。また、談話中でトピックが継続している場合は、旧情報の連続的な提示になるため、談話的有標性の観点からは最も無標である。一度、談話のトピックから外れて、再度トピックとして導入する場合は、旧情報の再提示（再導入）になるため、新規のトピックの導入と継続的なトピックへの言及との中間であると考えられる。

表1は、談話における有標性を3種類の談話文脈（新規のトピックの導入、既知のトピックの（再）導入、継続的なトピックへの言及）から捉え、右へ行くほど談話的に有標であることを示している。

表1：談話的有標性

無標 (unmarked)		有標 (marked)		
継続的なトピックへの言及 ³	<	既知のトピックの（再）導入	<	新規のトピックの導入

(Chaudron & Parker, 1990 : 48, Table 3 筆者訳 (一部改変))

表2は、表1で示された3種類の談話文脈において、トピック名詞句がどのように表現されるかを表したものである。新規のトピックを導入する際、英語では不定冠詞 (a/an) を伴い、日本語では格助詞「が」を伴うことが期待される。また、既知のトピックを（再）導入する場合、英語では定冠詞 (the) を用い、日本語では副助詞「は」⁴を用いることが期待される。そして、継続的なトピックに言及する場合には、英語では代名詞を、日本語ではゼロ代名詞⁵を用いることが期待される。

³ Chaudron & Parker (1990) では、“refer to current topic (現在のトピックへの言及)”となっているが、本稿では、Kajiwara & Minami (2008) を参考にし、「継続的なトピックへの言及」と言い換える。

⁴ 助詞「は」に関しては、副助詞として分類する説以外に、係助詞として分類する説もある(伊坂, 1997 : 107-111 ; 佐治, 1992 : 37-44 ; 鈴木, 2015 : 115-131)。

表2：日英語の指示対象と談話的有標性

	継続的なトピック	既知のトピック	新規のトピック
英語	代名詞	定冠詞 (the) + NP ⁶	不定冠詞 (a/an) + NP
日本語	φ (ゼロ代名詞)	NP + は	NP + が ⁵

(Chaudron & Parker, 1990 : 46, Table 1 筆者訳)

Chaudron & Parker (1990) は、以上のように談話的有標性を定義した上で、成人の日本人英語学習者40名を対象に、英語の談話におけるトピック名詞句の導入・維持に関する調査を行った。データ分析の結果、3種類の談話文脈を区別していたことから、談話文脈の識別に関する普遍性の存在を示した。また、英語のレベルが低い学習者は、どの談話文脈においても、無標な指示形式を過剰に生成する傾向があったことから、単純な構造の習得を経て、複雑な構造の習得が可能になるという、発達段階の存在を示した。

2.2. 鈴木・浅野・平川 (2014)

鈴木・浅野・平川 (2014) は、Chaudron & Parker (1990) で提案されている談話的有標性に基づくトピック名詞句の導入・維持に関する研究を行った。日本語母語話者 (小学生4名、中学生6名、高校生6名、大人6名) を対象に、Frog storyを用いてL1である日本語のデータ収集を行った。データ分析の結果、どの年代グループでも、3種類の談話文脈におけるトピック名詞句の言語形式が異なっており、各談話文脈において期待される言語形式が高頻度で使用されていることが確認できた。また、既知のトピックの (再) 導入に関する小学生のデータで、無標で

5 音形を持たない、つまり、音声的に具現化されないゼロ形式の代名詞のことである (原口・中村, 1992 : 524-527)。

6 NPは、noun phrase (名詞句) の略である。

ある形式（ゼロ代名詞）の過剰生成と思われる結果も得られた。子どもから大人へと日本語の言語能力レベルが上がるにつれ、より有標な言語形式が産出されるようになるという結果も得られたことから、「有標な談話文脈と結びつく言語形式よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式を過剰に生成する」という予測を支持する結果であった。

2.3. 鈴木・浅野・平川（2015a）

鈴木・浅野・平川（2015a）では、日本在住の外国籍の中学生（中国出身3名、フィリピン出身3名）を対象にしたL2である日本語のナラティブでのトピック名詞句の導入・維持を縦断的に調査した。発話データは、Frog storyを用いて収集されたものを使用し、文字化する際には、CHILDES（Child Language Data Exchange System）の日本語版フォーマット（JCHAT）で入力を行った（MacWhinney, 2000；Oshima-Takane & MacWhinney, 1995）。

データ分析の観点、鈴木ほか（2014）と同様に、Chaudron & Parker（1990）で提案されている談話的有標性に基づくトピック名詞句の導入・維持であった。調査の結果、各談話文脈（継続、既知、新規）でのトピック名詞句の言語形式に応じて期待される言語形式が使用できており、追調査時にはより正確に期待される言語形式の使用ができていた。特に、既知のトピックにおいて、中国籍の生徒に関しては、無標の言語形式（ゼロ代名詞）の過剰生成を経て有標の言語形式の使用が出来るようになるという、言語発達が確認できた。しかし、フィリピン国籍の生徒に関しては、発達と思われる箇所は確認できなかった。

以上、本研究に関わる先行研究を概観したが、どの研究も学習者のL1とL2の関係を調査したものではない。したがって、本研究では、田浦（2014）に従い、ナラティブにおけるトピックの導入・維持に関し

て、調査参加者のL1（英語）とL2（日本語）の比較も行うこととする。

3. 本研究

3.1. 研究課題

本研究は、2つのセクションで構成されている。1つ目は、学習者の日本語（L2）と日本語母語話者の日本語（L1）との比較研究〔以下、調査（A）〕、2つ目は、学習者の日本語（L2）と学習者の母語である英語（L1）との比較研究〔以下、調査（B）〕である。

本研究の研究課題は、以下の通りである。なお、研究課題Ⅰ及びⅡは調査（A）に関するもの、研究課題Ⅲ及びⅣは、調査（B）に関するものである。

- I. 日本語学習者の日本語（L2日本語）と日本語母語話者の日本語（L1日本語）のトピック名詞句の導入・維持の方法に違いはあるのか。
- II. L2日本語とL1日本語での相違点があるとしたら、どのような部分で異なるのか。
- III. 日本語学習者の日本語（L2日本語）と母語の英語（L1英語）のトピックの導入・維持の方法に違いはあるのか。
- IV. L2日本語とL1英語での相違点があるとしたら、どのような部分で異なるのか。

3.2. 調査参加者

本研究の調査参加者は、アメリカの大学に通っている大学生6名であった。調査参加者のL1は英語で、L2は日本語である。参加者の日

本語のレベルは、上級以上の日本語のクラスを履修中か履修済みである。また、全員が交換留学生として、日本の大学への半年以上の留学経験がある。調査（A）で、L2日本語の比較対象とするL1日本語のデータは、日本人の大学生から収集したもの（鈴木・浅野・平川, 2015b）を使用する。表3に、調査参加者の背景情報を記す。

表3：調査参加者の背景情報

	日本語学習者 (実験群) [L1英語；L2日本語]	日本語母語話者 (統制群) [L1日本語]
調査協力者数	6人	10人
平均年齢	21.8歳	20.2歳
年齢範囲	19～22歳	19～22歳

3.3. データ収集方法

本研究においても、上述の鈴木ほか（2014, 2015a, 2015b）で用いられたFrog storyを使用した。調査参加者には、まず絵本の1ページ目から最後まで、1ページずつ目を通し、内容を確認する時間を与えた。その後、Frog storyを見ながら、絵本の内容を出来るだけ詳しく話す課題を与えた。音声データは、ICレコーダーを用いて記録した。データ収集の際には、調査参加者に個別に面接し指示を与え、音声を記録した。また、L2である日本語のデータを最初に収集し、その後、L1である英語のデータを収集した。

Frog storyは、主人公の男の子と犬を中心に描かれている。したがって、男の子と犬は、場面に応じて、継続的なトピックまたは既知のトピックとなる。男の子と犬は、物語の中で色々な動物に出会うので、その動物たちは新規のトピックとなる。Chaudron & Parker (1990) は、

4枚の連続した絵をもとに、トピック名詞句のシフトを調査している。Frog storyは、場面設定が比較的単純で、各場面でトピックとなる名詞句が唯一的に決まるので、ナラティブにおけるトピック名詞句のシフトを調査するのに適している。

3.4. 仮説と予測

「有標性が第二言語の習得に影響を与える」という仮説のもと、以下の予測の検証を行う。

- (i) 実験群（日本語学習者）の日本語のナラティブにおけるトピック名詞句は、有標な談話文脈と結びつく言語形式よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式を過剰に生成する。
- (ii) 実験群（日本語学習者）は、L2日本語とL1英語のナラティブの両方において、各談話文脈の識別ができています。

予測(i)は、より有標な談話文脈と結びつく言語形式、つまり「名詞句+助詞」よりも、無標な談話文脈と結びつく言語形式、つまりゼロ代名詞を過剰に生成するということである。予測(ii)に関しては、3種類の談話文脈（継続、既知、新規）の識別に普遍性があり、談話文脈ごとに、期待される言語形式でトピック名詞句を具現化するということである。トピックが継続している場合、そのトピックに対して毎回言及する必要はなく、ゼロ代名詞（音的に具現化しないこと）の使用が期待される。また、トピックが既知の場合には、トピックの再焦点化が必要になるので、「名詞句+助詞（は）」の言語形式が期待される。そして、トピックが新規の場合は、今まで無かった新たなものに言及するので、「名詞句+助詞（が）」の言語形式が期待される。

4. 結果と考察

本節では、調査（A）（実験群のL2日本語と統制群のL1日本語の比較）の結果を述べ、その後、調査（B）（実験群のL2日本語とL1英語の比較）の結果を述べる。Chaudron & Parker（1990）に基づき、談話的有標性の観点から、ナラティブを分析する。特に、3つの談話文脈（新規のトピックの導入、既知のトピックの（再）導入、継続的なトピックへの言及）におけるトピック名詞句の導入・維持について、トピックとなる名詞句の表現方法に焦点を当て、分析を行った⁷。

4.1. 調査（A）（L2日本語とL1日本語の比較）

本節では、実験群のL2日本語のデータ [以下、L2日本語] と統制群のL1日本語 [以下、L1日本語] のデータを比較する。

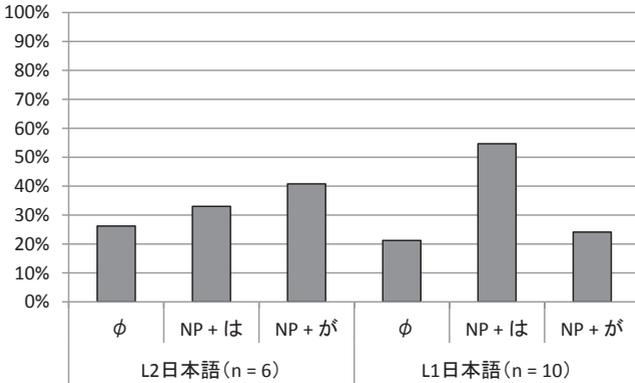
4.1.1. トピック名詞句の産出頻度

表4及びグラフ1は、トピックとなる名詞句の産出頻度を言語形式ごとに表したものである。

表4：トピック名詞句の産出頻度⁸

L2日本語 (n = 6)			L1日本語 (n = 10)		
φ	NP + は	NP + が ^s	φ	NP + は	NP + が ^s
26.21%	33.01%	40.78%	21.22%	54.66%	24.12%
(27)	(34)	(42)	(66)	(170)	(75)

⁷ 従属節内のトピック名詞句は「NP+が」で標示されるため（久野, 1973: 27-35）、本研究のデータ分析では、主節のトピック名詞句のみを対象とする。



グラフ1：トピック名詞句の産出頻度

表4及びグラフ1より、L2日本語とL1日本語との間で、「NP+は」と「NP+が」の使用に違いがあることが確認できる。L2日本語の「NP+は」の使用が33.01%で「NP+が」の使用が40.78%であるのに対し、L1日本語の「NP+は」の使用が54.66%で「NP+が」の使用が24.12%である。ゼロ代名詞の使用に関しては、「学習者は無標の指示形式を過剰生成する」という予測(i)に反して、L2日本語(26.21%)とL1日本語(21.22%)では、大きな差はないことが分かる。

次節以降で、どの談話文脈において「NP+は」と「NP+が」の産出頻度に差が出たのかを検証する。4.1.2節では継続的なトピックへの言及について、4.1.3節では既知のトピックの(再)導入について、そして4.1.4節では新規のトピックの導入について、それぞれトピック名詞句がどのような言語形式で表現されたのかについて詳しく述べる。

8 実験群のL2日本語及び統制群のL1日本語でのトピックとなる名詞句の産出率を表したものである。カッコ内は、確認された数値を記したものである。

4. 1. 2. 継続的なトピックへの言及

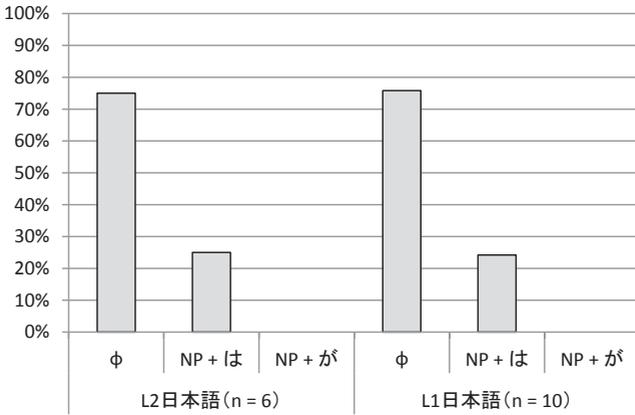
以下の表5、及びグラフ2は、継続的なトピックへ言及した際の言語形式の産出頻度を示している。

表5：継続的なトピックへの言及

	L 2 日本語 (n = 6)			L 1 日本語 (n = 10)		
	φ	NP + は	NP + が ⁹	φ	NP + は	NP + が ⁹
継続	75.00%	25.00%	0.00%	75.81%	24.19%	0.00%
	(15)	(5)	(0)	(47)	(15)	(0)

継続的なトピックへの言及は、談話文脈上では最も無標と考えられる。したがって、既に確立したトピックに言及する際、日本語ではゼロ代名詞を用いることが期待される (Chaudron & Parker, 1990)⁹。表5及びグラフ2より、L 1 日本語ではゼロ代名詞の使用が75.00%、「NP + は」の使用が25.00%であった。一方、L 2 日本語では、ゼロ代名詞の使用が75.81%、「NP + は」の使用が24.19%であった。L 2 日本語とL 1 日本語では、継続的なトピックへの言及において、ゼロ代名詞の使用と「NP + は」の使用に差が無いことが確認された。また、「NP + が」に関しては、L 1 日本語、L 2 日本語の両方において1つも確認されなかった。以上より、継続的なトピックへの言及に関しては、予測 (ii) と合致していると考えられる。

⁹ 日本語のナラティブでは、トピックが継続している場合でも、ゼロ代名詞の使用と同様に名詞句の使用が比較的多いことも確認されている (Blais, Oshima-Takane, Genesee & Hirakawa, 2010)。



グラフ2：継続的なトピックへの言及

4.1.3. 既知のトピックの（再）導入

以下の表6、及びグラフ3は、既知のトピックを（再）導入する際の言語形式の産出頻度を示している。

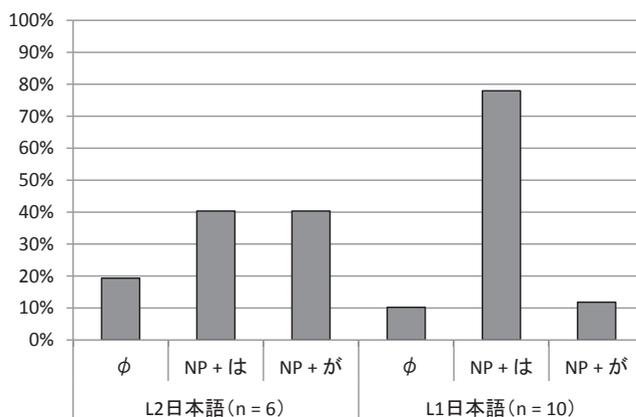
既知のトピックを（再）導入する場合、既に談話に登場している人物であっても、談話文脈上ではトピックとして再び焦点化される必要があるため、名詞句（「NP+は」）の使用が期待される（Chaudron & Parker, 1990）。表6及びグラフ3から、L1日本語では、「NP+は」の使用が77.96%であり、ゼロ代名詞の使用（10.22%）や「NP+が」の使用（11.83%）を大幅に上回っていることが確認できた¹⁰。一方で、L2日本語は、「NP+は」の使用（40.32%）と「NP+が」の使用（40.32%）の頻度が等しいことが確認できた。この結果より、L2日本語学習者は、助詞の「は」と「が」の使用で混乱していると考えられる。既知のト

¹⁰ 既知のトピックに対してゼロ代名詞が使用されているのは、調査参加者が調査実施者に対して絵本を見せながら（指差しをしながら）語っていたことが影響している可能性が考えられる。

ピックの（再）導入に関して、ゼロ代名詞ではなく「NP+が」の過剰生成が確認できたことから、予測（i）の「無標な形式の過剰生成」とは合致しない結果であった。

表6：既知のトピックの（再）導入

	L2日本語 (n = 6)			L1日本語 (n = 10)		
	ϕ	NP + は	NP + が ^s	ϕ	NP + は	NP + が ^s
既知	19.35%	40.32%	40.32%	10.22%	77.96%	11.83%
	(12)	(25)	(25)	(19)	(145)	(22)



グラフ3：既知のトピックの（再）導入

4.1.4. 新規のトピックの導入

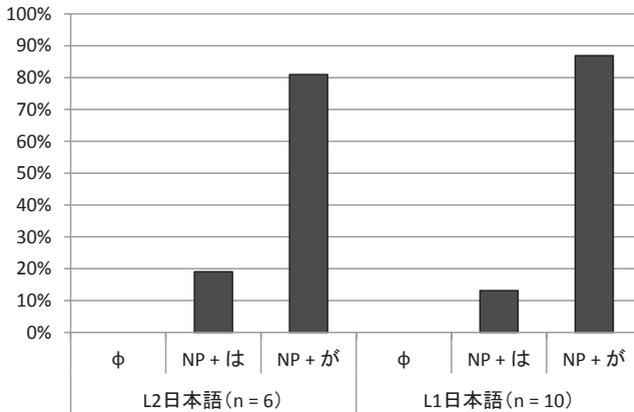
以下の表7、及びグラフ4は、新規のトピックを導入する際の言語形式の産出頻度を示している。

新規のトピックの導入は、談話文脈上では最も有標であり、名詞句（「NP+が」）の使用が期待される（Chaudron & Parker, 1990）。表7及

びグラフ4から、L2日本語の「NP+が」の使用が80.95%、「NP+は」の使用が19.05%、L1日本語の「NP+が」の使用が86.89%、「NP+は」の使用が13.11%であった。また、両グループにおいてゼロ代名詞の使用は1つも確認されなかった。これらの結果より、新規のトピックの導入に関しては、L2日本語とL1日本語の結果は概ね合致すると言って良い。以上より、新規のトピックの導入に関しては、予測(ii)と合致していると考えられる。

表7：新規のトピックの導入

	L2日本語 (n = 6)			L1日本語 (n = 10)		
	φ	NP + は	NP + が	φ	NP + は	NP + が
新規	0.00%	19.05%	80.95%	0.00%	13.11%	86.89%
	(0)	(4)	(17)	(0)	(8)	(53)



グラフ4：新規のトピックの導入

4.2. 調査 (B) (L2日本語とL1英語の比較)

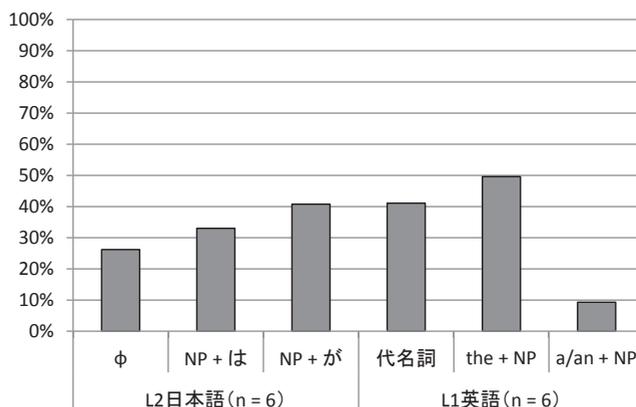
本節では、実験群のL2日本語のデータ [以下、L2日本語] と実験群のL1英語 [以下、L1英語] のデータを比較する。L2日本語のデータとL1英語のデータは、同一の調査参加者から収集したものである。

4.2.1. トピック名詞句の産出頻度

表8及びグラフ5は、トピックとなる名詞句の産出頻度を言語形式ごとに表したものである。

表8：トピック名詞句の産出頻度

L2日本語 (n = 6)			L1英語 (n = 6)		
ϕ	NP + は	NP + が	代名詞	the + NP	a/an + NP
26.21%	33.01%	40.78%	41.09%	49.61%	9.30%
(27)	(34)	(42)	(53)	(64)	(12)



グラフ5：トピック名詞句の産出頻度

表8及びグラフ5より、L2日本語とL1英語との間で、ゼロ代名詞と代名詞の使用、「NP+が」と「a/an+NP」の使用に違いがあることが確認できた。L2日本語のゼロ代名詞の使用が26.21%であるのに対し、L1英語の代名詞の使用が41.09%であった。また、L2日本語の「NP+は」の使用が33.01%であるのに対し、L1英語の「the+NP」の使用が49.61%であった。さらに、L2日本語の「NP+が」の使用が40.78%であるのに対し、L1英語の「a/an+NP」の使用が9.30%であった。

次節以降で、どの談話文脈において言語形式の使用に差が出たのかを検証する。4.2.2節では継続的なトピックへの言及について、4.2.3節では既知のトピックの（再）導入について、そして4.2.4節では新規のトピックの導入について、それぞれトピックとなる名詞句がどのような言語形式で表現されたのかについて詳しく述べる。

4.2.2. 継続的なトピックへの言及

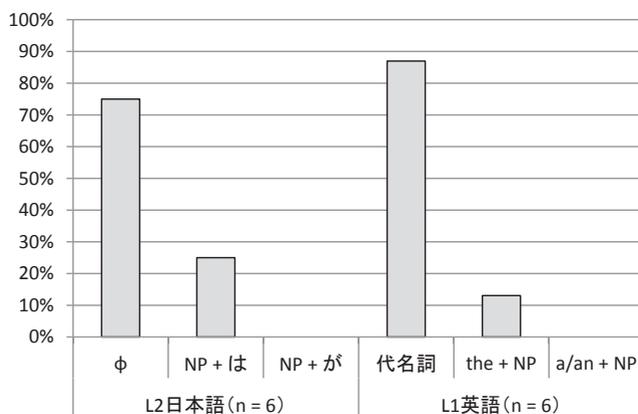
以下の表9、及びグラフ6は、継続的なトピックへ言及した際の言語形式の産出頻度を示している。

継続的なトピックへの言及は、談話文脈上では最も無標である。したがって、既に確立したトピックに言及する際、日本語ではゼロ代名詞、英語では代名詞を用いることが期待される (Chaudron & Parker, 1990)。表9及びグラフ6より、L2日本語でのゼロ代名詞の使用が75.00%、L1英語での代名詞の使用が86.96%であった。これより、L1英語での代名詞の使用ほどではないが、L1日本語でのゼロ代名詞の嗜好性が高いことが確認できた。また、L2日本語での「NP+は」の使用が25.00%、L1英語での「the+NP」の使用が13.04%であった。さらに、「NP+が」及び「a/an+NP」に関しては、L2日本語とL1英

語の両方において1つも確認されなかった。以上より、継続的なトピックへの言及に関しては、予測（ii）と合致していると考えられる。

表9：継続的なトピックへの言及

	L 2 日本語 (n = 6)			L 1 英語 (n = 6)		
	ϕ	NP + は	NP + が	代名詞	the + NP	a/an + NP
継続	75.00%	25.00%	0.00%	86.96%	13.04%	0.00%
	(15)	(5)	(0)	(40)	(6)	(0)



グラフ6：継続的なトピックへの言及

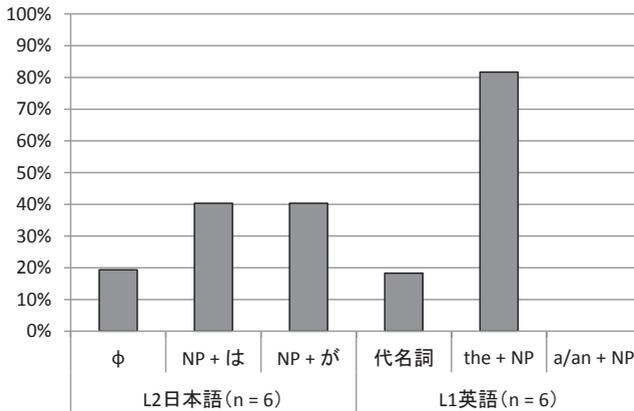
4.2.3. 既知のトピックの（再）導入

以下の表10、及びグラフ7は、既知のトピックを（再）導入する際の言語形式の産出頻度を示している。

既知のトピックの（再）導入の際は、日本語では「NP+は」、英語では「the+NP」の使用が期待される (Chaudron & Parker, 1990)。表10及びグラフ7から、L 2 日本語での「NP+は」と「NP+が」の使用、L 1 英語での「the+NP」と「a/an+NP」の使用で差があることが確

表10：既知のトピックの（再）導入

	L 2 日本語 (n = 6)			L 1 英語 (n = 6)		
	φ	NP + は	NP + が	代名詞	the + NP	a/an + NP
既知	19.35%	40.32%	40.32%	18.31%	81.69%	0.00%
	(12)	(25)	(25)	(13)	(58)	(0)



グラフ7：既知のトピックの（再）導入

認できた。L 2 日本語では、「NP + は」の使用が40.32%、「NP + が」の使用が40.32%、ゼロ代名詞の使用が19.35%であった。一方で、L 1 英語では、「the + NP」の使用が81.69%であり、代名詞の使用（18.31%）を大幅に上回っていることが確認できた。また、L 1 英語では、「a/an + NP」は1つも確認されなかった。これらの結果より、L 2 日本語学習者が既知のトピックの（再）導入の際に、ゼロ代名詞ではなく「NP + が」の過剰生成が確認できたことから、予測（i）の「無標な形式の過剰生成」とは合致しない結果であった。しかし、L 1 英語の結果では、既知のトピックの（再）導入に関して、適した言語形式（「the + NP」）の使用ができていたことから、「談話文脈の識別に普遍性がある」とい

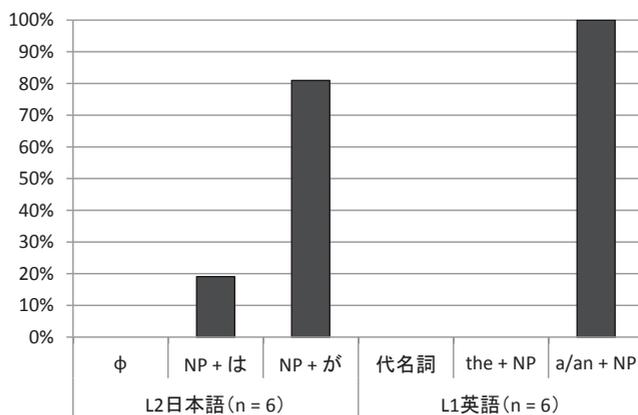
う予測 (ii) と合致する結果であった。

4.2.4. 新規のトピックの導入

以下の表11、及びグラフ8は、新規のトピックを導入する際の言語形式の産出頻度を示している。

表11：新規のトピックの導入

	L 2 日本語 (n = 6)			L 1 英語 (n = 6)		
	φ	NP + は	NP + が ^s	代名詞	the + NP	a/an + NP
新規	0.00%	19.05%	80.95%	0.00%	0.00%	100.00%
	(0)	(4)	(17)	(0)	(0)	(12)



グラフ8：新規のトピックの導入

新規のトピックの導入は、談話文脈上では最も有標である。日本語では「NP + が」、英語では「a/an + NP」の使用が期待される (Chaudron & Parker, 1990)。表11及びグラフ8から、L 2 日本語の「NP + が」の

使用が80.95%、「NP+は」の使用が19.05%、L 1 英語の「a/an+NP」の使用が100%であった。また、両グループにおいてゼロ代名詞の使用は1つも確認されなかった。これらの結果より、新規のトピックの導入に関しては、L 2 日本語とL 1 英語の結果は概ね合致すると言って良い。以上より、新規のトピックの導入に関しては、予測 (ii) と合致していると考えられる。

4. 3. 結果のまとめ

本節では、調査 (A) と調査 (B) の結果をまとめる。調査 (A) に関しては、実験群のL 2 日本語と統制群のL 1 日本語の比較を行った。その結果、既知のトピックの (再) 導入に差があることが分かった。L 2 日本語は、L 1 日本語と比べると、「NP+は」よりも「NP+が」を過剰に産出していた。この結果は、Nakamura (1993) とも一致する。Nakamura (1993) は、Frog storyを用いて日本語環境の子どもを対象に「は」と「が」の習得を調査した。その結果、子どもは、「が」の習得を経てから「は」の習得がなされることを明らかにした。また、発達段階に関しては、既知のトピックに対しても「は」を使用する傾向が強いことも述べている。調査 (B) についても、既知のトピックの (再) 導入の使用に違いが確認できた。L 1 英語では、既知のトピックに対して「the+NP」が使用できている、つまり、既知の談話文脈の理解はできているが、L 2 日本語では、「NP+は」と「NP+が」で混乱が生じていた。

以上より、本研究の調査参加者者 (実験群) である日本語学習者は、未だに日本語の習得段階であり、「『NP+は』は、既知のトピック (旧情報) を再導入する際に使用する」という指導を加えることで、習得が促進する可能性がある。

5. おわりに

本研究では、英語を母語とする日本語学習者を対象に、L2日本語とL1日本語の比較、及びL2日本語とL1英語の比較を通して、学習者のナラティブ能力、特にトピック名詞句の導入・維持に関して実証的な研究を行った。調査の結果、L2日本語とL1日本語の比較、及びL2日本語とL1英語の比較の両方の研究において、既知のトピックの（再）導入する際の困難さが確認できた。興味深い点としては、L1英語では、既知の談話文脈が理解できている（「the+NP」の産出ができてい）るが、L2日本語に適用できていない点である。

以下（1）～（3）に、学習者のナラティブの一部を載せる。（1）の学習者Aは、「NP+が」と「NP+は」の識別ができている例である。また、（2）の学習者Bは、「NP+が」と「NP+は」の区別が無く、ほぼすべての文を「NP+が」で語っている例である。また、（3）の学習者Cは、「NP+が」と「NP+は」の区別があるが、逆転して使用している例である。

（1）学習者A

昔は、男の子と犬とカエルがいました。ある日、カエルは男の子の部屋から出かけました。男の子は、起きた時に、カエルがいないと見ました。それで、φブーツの中を見て、部屋で探しましたが、見つけれませんでした。・・・

（2）学習者B

男の子と犬がいて、ジャーに入っているカエルを見えています。男の子と犬が寝て、カエルがエスケープしてみたいです。カエルが逃げて、男の子と犬がびっくりしました。男の子と犬が探して

います。・・・

(3) 学習者C

男の子^[は]、犬とカエルを見えています。世の中に、カエル^[が]逃げ
てしまいます。朝になると、男の子^[が]カエルが見つけれられません。
◇悲しそうです。・・・

以上、英語を母語とする日本語学習者のナラティブでのトピックの導入・維持に関して、Chaudron & Parker (1990) を基に、日本語母語話者のデータとの比較を通して明らかにした。本研究のデータ数は非常に限られているため、今後は、さらにデータ数を増やし、学習者のレベル分けを行い、より信頼性の高い研究を行っていく必要がある。本研究は、主節内のトピック名詞句の導入・維持に関する研究であったが、助詞の習得に関する研究、助詞と動詞との関わりに関する研究など¹¹、多くの観点から学習者のナラティブを観察していくことで、新たな発見が得られる可能性もある。また、日本語を母語とする英語学習者や日英語バイリンガル話者を対象に、日英両言語でのナラティブを比較することで、興味深い結果が得られる可能性もある。まだまだ残された課題は多いので、多くの可能性を視野に入れて研究を進めていきたい。

謝辞

本研究は、平成26～28年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究（B）『継承語および第二言語の習得における通言語的影響に関す

11 今回収集したL2日本語のデータに「カエルの声^を聞こえます」や「シカに捕まえた」等の助詞と動詞に関する誤りが確認できたため、今後の課題として取り組んでいく予定である。

る理論的・実証的研究』（課題番号：26284081、研究代表者：平川眞規子）の研究成果の一部である。

本論文の執筆に関して、内容に関する丁寧なコメントをしてくださった2名の査読者の方々、NYCAS2015で有益なコメントをくださった丘培培教授（Vassar College）をはじめとする学会参加者の皆様、研究指導教員の平川眞規子教授（文教大学）、共同研究者の浅野明代教授（東京国際大学）に、この場を借りて感謝の意を表する。

参考文献

- 伊坂淳一（1997）『ここからはじまる日本語学』東京：ひつじ書房。
- 久野暉（1973）『日本文法研究』東京：大修館書店。
- 佐治圭三（1992）「構文—主語・主題・述語等—」. 玉村文郎（編）『日本語学を学ぶ人のために』（pp. 23-51）. 京都：世界思想社。
- 鈴木一徳・浅野明代・平川眞規子（2014）「日本語母語話者のナラティブ構造に関する一考察」『言語と文化』26, 87-115. 文教大学大学院附属言語文化研究所。
- 鈴木一徳・浅野明代・平川眞規子（2015 a）「中国語・タガログ語を母語とする日本語学習者のナラティブ発達—日本語母語話者との比較—」『言語と文化』27, 34-69. 文教大学大学院附属言語文化研究所。
- 鈴木一徳・浅野明代・平川眞規子（2015 b）「日本語でのナラティブにおけるトピック管理に関する一考察—談話的有標性及び構造的有標性の観点から—」『言語科学会第17回年次国際大会予稿集』（pp. 94-97）. 言語科学会。
- 鈴木孝明（2015）『日本語文法ファイル—日本語学と言語学からのアプローチ—』東京：くろしお出版。

- 田浦秀幸 (2014) 「読み・書き・語る能力の発達」. 山本雅代 (編著) 『バイリンガリズム入門』 (pp. 71-77). 東京: 大修館書店.
- 原口庄輔・中村捷 (1992) 『チョムスキー理論辞典』 東京: 研究社.
- Blais, Mary-Jane., Oshima-Takane, Yuriko., Genesee, Fred., & Hirakawa, Makiko. (2010). Crosslinguistic influence on argument realization in Japanese-French bilinguals. In K. Franich et al. (eds.), *Proceedings of the 34th annual Boston University Conference on Language Development*. (pp. 34-45). Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Chaudron, Craig. & Parker, Kate. (1990). Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrases. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 43-64.
- Eckman, Fred., Moravcsil, Edith., & Wirth, Jessica. (eds.) (1986). *Markedness*. New York: Plenum Press.
- Kajiwara, Makiko. & Minami, Masahiko. (2008). Narrative construction by bilingual children: Referential topic management. *Studies in Language Sciences*, 7, 79-90.
- MacWhinny, Brian. (2000). *The CHILDES project: Tools for analyzing talk* (3rd edition). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Mayer, Mercer. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- Nakahama, Yuko. (2009). Cross-linguistic influence on referent introduction and tracking in Japanese as a second language. *The Modern Language Journal*, 93 (2), 241-261.
- Nakamura, Kei. (1993). Referential structure in Japanese children's narratives: The acquisition of *wa* and *ga*. *Japanese/Korean Linguistics*, 3, 84-99.

英語を母語とする日本語学習者を対象とした日英語ナラティブの比較
—トピック名詞句に着目して—

Oshima-Takane, Yuriko. & MacWhinney, Brian. (1995) *CHILDES manual for Japanese*. Montreal: McGill University/ Nagoya: Chukyo University.